

は | じ | め | に |

このハンドブックは独立行政法人福祉医療機構の「平成25年度社会福祉振興助成金」を受け『若者主体の自立実現支援体制創造事業』として実施した検討会やモデル事業によって得られた成果をまとめたものです。生活困窮を経験した若者たちが自分らしく、それぞれの力と可能性を発揮しながら自立するための理解や知恵がつまっています。

1部は

イラスト解説 Version

「自立」その前に …… わかってほしい私たちの現状
『近くていっぱい困窮 VS 遠くてかすかな支援』

事業に参加した若者たちからの聴き取りをもとに、18歳の女の子「北野愛（きたのあい）」さんの生まれてから、成長し、自立支援につながるまでの物語に若者たちの様々なエピソードを取り入れています。具体的にイメージできる事例としてわかりやすくイラストと解説を交えて説明しています。生活困窮の中で育った若者たちの目線や気持ち、そして子どもや若者を取り巻く生活困窮の現状をリアルに感じ取り、理解をしてもらおうとするものです。

2部は

理論整理 Version

「自立」その前に …… 一緒に考えてほしいこれからの支援
『個人モデル VS 社会モデル』

このモデル事業に参加した4団体の支援実績や検討会を通じて明らかになった若者たちの抱える現状や社会の状況、さらにはこれからの支援がどうあるべきか？当事者である若者たちにも参加してもらい、知恵や本音を出してもらいながら、まとめました。

3部は

参考資料

この事業を実施したNPO法人地域生活支援ネットワークサロンと協力団体（NPO法人訪問型フリースクール漂流教室、NPO法人ウェルアナザーデザイン、NPO法人コミュニティワーク研究実践センター月形事業所わくわーく）の実践紹介が掲載されています。

ま | え | が | き |

人は誰もがいろいろな事情で、「支援を受ける側」になる可能性があります。子ども、母子家庭、障がい、高齢者、病気、不登校、貧困の問題など、今の社会には「福祉」「生きづらさ」のもとがたくさん潜み、それが誰のもとにやってくるかはわかりません。

いつ誰が困るかわからないからこそ、福祉制度はあります。しかし、制度前提で「支援を受ける側」になる時には、往々にして支援と引き換えに「かくあるべき」「こうふるまうことが好ましい」という社会からの期待や理想像などの見えないプレッシャーが待ち受けています。それは、周囲からだけではなく自分自身にも内在化され「こうあらねばならない」「ここで頑張らないといけない」「これしかできない自分はダメなやつだ」という自分へのプレッシャーとなり、自分を追い詰めていくことにもなりかねません。

社会的に弱い立場にいる人たちを助ける仕組みは保護や支援、教育の名のもとに、実は当事者から権利と力を奪いかねないリスクと表裏一体にあるのではないのか？またそのリスクは当事者の我慢と頑張りで容易に潜在化し、支援をいつも正当化します。その側面が実は自立を阻害し、支援そのものの質向上も阻んでいるのではないのか？その課題を乗り越えなければ自立支援の先は見えないのではないのか？という問題意識からこの事業の実施とハンドブックの作成に至りました。

ここ数年で注目をされるようになった「若者の貧困問題」。「生きづらさ」を抱える若者たちを単にかわいそうな、不幸な支援の対象者として捉えて一方的に支援をすることでは何も解決しません。若者たちを当事者の視点を持つ貴重な人材として位置付けることで、自立支援事業の有効な担い手になる可能性があるかと私たちは信じています。若者たちの鋭い感受性や潜在能力、そしてリアルな悩みや課題、弱さをもこの事業にいかんなく発揮され、またこうした問題に興味や関心を持つ若者たちの参加も含めて、地域の現場と当事者のリアリティにこだわってこのハンドブックを作成しました。

今、新しく制度が創出されようとしている生活困窮者自立支援の議論や支援プロセスに当事者の参画が積極的に推進されていないことに強い危機感と違和感があります。今だからこそ、当事者の若者たちから聴き、多様な参加のもと、試行錯誤しながら共に歩む事業として企画し、実施しました。

これからの社会、地域は課題でいっぱいですが、誰かをあてにしたり、批判したり、愚痴を言っても、ましてや自分だけが我慢しても何も変わらない。制度を変えるのも社会を変えるのも地域を変えるのも一人ひとりの気持ちと行動なのです。本事業はそうした若者たちの潜在能力と若者たちだけではなく私たち市民全体の可能性を信じ支援者と学び合うことを基盤としています。

（事業統括 日置 真世）

目次

はじめに・まえがき	2
第1部 イラスト解説Version	5
「自立その前に…… わかってほしい私たちの現状」	
『近くていっぱい困窮』VS『遠くてかすかな支援』	
～北野愛（18歳）が生まれてから、支援につながるまでのストーリー	
報告 若者たちとの聴き取り調査から	20
第2部 理論整理Version	21
「自立その前に…… 一緒に考えてほしいこれからの支援」	
『個人モデル』VS『社会モデル』	
(1) 現状の整理	22
①若者たちを取り巻く社会を理解する	22
②「自立支援」から「相互自己実現」へ	25
(2) 「支援」をめぐる課題の整理	32
①若者の自己実現を左右する因子	32
②相互自己実現のための二つの前提	33
③支援者と若者の関わり4つのパターン	35
(3) これから目指したい方向性・あり方	37
①相互自己実現の4つの原則	38
②必要とされる具体的な社会資源の提案	41
報告 若者たちとの検討会から	44
第3部 参考資料編	45
連携4団体の実践紹介	46
本事業の実施の基盤となる支援実践と経過	69
若者主体宣言	77
あとがき	78・79
編集後記	80

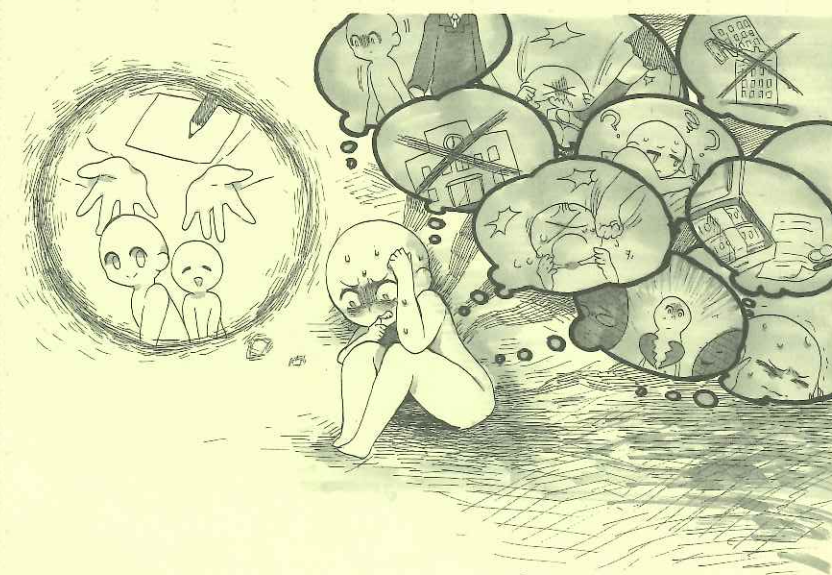
第1部

イラスト解説 Version

「自立」その前に…… わかってほしい私たちの現状

『近くていっぱい困窮』VS『遠くてかすかな支援』

～北野愛（18歳）が生まれてから、支援につながるまでのストーリー～



このストーリーは実際に様々な厳しい家庭で生まれ育った若者たちの聴き取りをもとにしてつくりました。

似たような思いや経験を持つ若者たちには、「自分だけじゃない」「自分にも道がある」と思えるように、また我慢をせずに相談をしてもらえるように。

似たような子どもや若者たちを応援する人たちには、若者たちをより理解し、その暮らしてきた道を想像し、「自分たちに何ができるか？」考え、行動してもらえるように。

また、今を生きるすべての人たちが「自分とは関係のないこと」と思わずに、今までよりも少しでも若者たちの現状に関心を持ってもらえたらと思っています。



基本 プロフィール

学校で「進路は？」って聞かれるけど
そんなこと考えられない
単位も足りないし 卒業だって怪しい

将来の夢はって？
ああ小学校の頃は保育士になりたかったけど
資格取るのに進学するなら
バイトして世帯分離して奨学金借りればって
言われたけど「家の状況じゃ無理だな」と

どうせ私に明るい未来なんてあるわけないしね
これまで色々あったんだ 聞いてくれる？

名前 北野 愛（18歳）生活保護世帯

定時制高校3年生 弟の面倒や家事、バイトで疲れて学校は休みがち

家族：母（45歳）10年以上うつを患う 家事などはほとんどできず、体調
が悪い時は愛に依存をしたり、自殺未遂したこともある

義理の父（38歳）愛が小6の頃に家に入り浸るようになり、中3で母と再婚
愛に対して暴言や暴力、お金を取り上げるなどがある
現在無職、働いてもトラブルを起こしてやめてしまう

弟（3歳）保育園も幼稚園も行かず 家にいる



誕生 〜 幼少編



1995年10月3日 ごくごく普通の家庭に
私は生まれた。

お父さんは会社員、お母さんは主婦
初めての赤ちゃんでたくさん写真もある



でも…私が3歳の時にお父さんが
リストラ¹されたらしい



お父さんは、リストラを隠して
借金²をしていたらしい
それが知らないうちにどんどん
ふくらんで、もうどうにもなら
ない状態になってから発覚
果てには恐喝事件まで起こし、
行方不明

そして、愛が4歳の時に離婚をした
お父さんの借金や恐喝の問題でお母さんはかなりのストレスを抱え、ふさぎこんだり、泣きだしたりすることが多くなった。ちょっとだけ行っていた幼稚園も行けなくなってやめた。
離婚後に生活保護の申請に行くが、うまくいかなかったらしい。知人を頼って宗教団体の関係者が役所にかけあい、保護受給ができた。



元気で優しくかったお母さんは別人みたいになった。まもなく「うつ病³」って診断されたらしい。遊んでくれたお父さんはいなくなった。家にはケースワーカーさんが時々やってきた。

まだ、小さかったからあんまり覚えていないけど、お母さんがどんどん別人になっていった記憶は強烈だった。その日によって機嫌が全然違ったから、ものすごく顔をうかがう⁴ようになった。できるだけ、お母さんを怒らせないように…幼稚園はちょっとだけ覚えているけど楽しかったなあ。家がごたごたしてからほとんど家にいたから友達とも遊べなかった。時々、おばあちゃんが来てくれるとご飯も作ってくれて嬉しかった。でも、お母さんとおばあちゃん、仲が悪くて⁵、お母さんの機嫌は悪くなるんだ。

1「リストラ」：若者たちのライフヒストリーからは親の失業問題の影響の深刻さを感じます。会社員ならリストラ、自営業なら業績不振や倒産。不況による負担はもっとも弱いところへ行く現状を痛感します。失業対策、再就職支援はもちろんのこと、せめて孤立させない追い詰めない支援体制が求められます。

2「借金」：失業とともに借金を含めお金のトラブルも非常に多く出てきます。課題として多いのにもかかわらず、使いやすい支援策がありません。ある意味、これだけお金の悩みが多いのですから、お金の悩みは「支援」につながるチャンスと言えます。新しく創設される生活困窮者自立支援制度においては「家計支援」というメニューがあります。これが単なる金銭管理になってしまっただけのチャンスとして活かすことができないでしょう。「家計支援」という道具を人とのつながりをつくり、自分の価値観や生き方に向き合い、自信回復、学習の機会として活用されるしくみや支援の姿勢、質が求められます。

3「うつ病」：親のメンタルヘルスの課題は極めて深刻です。子どもたちにとっては「病気だから仕方がない」という気持ちと「でも、自分がなぜこんなめに？」という気持ちの2つの間でゆれ、非常に苦しんでいます。大きくなり親元を離れてからもなお、病気の親を気遣ったり、振り回されたりそのジレンマはずっとついていきます。親の生活のサポートや若者たちの心のケアの重要性を痛感します。

4「顔をうかがう」：メンタルの課題や暴力を抱える家庭で生活する子どもは雰囲気や親の機嫌、体調の変化に非常に敏感になっています。いつもびくびくしたり、顔をうかがい、気に入るような言動を取ったりして、自分の気持ちや希望がわからなくなるだけではなく、上手に顔をうかがうことに達成感を見出す境地に陥ることすらあります。子ども時代に安心安全を奪われることのダメージは長く残ります。

5「お母さんとおばあちゃん、仲が悪くて」：生活困窮の家庭において親はいろいろな意味で孤立しています。一般的にもっとも支援を受けやすい親や親族からも見放されていたり、関係が悪化していることも多く、子どもたちもその影響を受けて必要な手助けを得られないケースも多くあります。



小学校時代 低学年編

何とか小学校に入学した。
でも初めてのことだらけ。

エピソード1 「給食が楽しみ」

学校の印象の一番は「給食が美味しかったこと」。先生⁹が時々、残ったパンをくれたり、他のクラスに残ったご飯まで集めてきておにぎりを作ってくれた。すごく嬉しかった。友達もたくさんできて楽しかったなあ。



エピソード2 「でも、時々学校に行けない日もあった」

学校はすごく楽しみだったけど、お母さんが具合悪い時には、「行かないで」って言うこともあったり心配で行けなかったこともある。朝起きれない⁷ときもあったし。家はどんどん汚くなっていった。台所には茶碗の山。部屋はゴミが散乱して、服もそこらへんに散らかっていた。お母さんは小型犬をもらってきた。犬のえさだけはいつもあった。あまりにお腹がすいて犬のえさを食べてみたこともあった。すごくまずかった。あんまり思い出したくない。



小学校時代 高学年編

エピソード1 「学校に持って行くものがない！」

算数で三角定規とコンパスを持ってきてって言われた。お母さんに言ったら「わかった」って言ったけど、用意してもらえなかった、図工の木工用ボンド、カッター、彫刻刀なんかも同じだった。お母さんに言うのは諦めて、先生からいつも借りた。でも、だんだん恥ずかしくなってきた⁸。遠足のとき、弁当を作ってもらえなくて休もうかと思ったら、先生が弁当をくれた。嬉しかったけど、嫌だった。「うちだけ、何でこんなお母さんなんだろう？」と思うようになった。家には友達を呼べなかった。



エピソード2 「男の人が出入りするように…」

お母さんがご飯をつくらないから、自分で作るようになった。家庭科では少し習ったけど基本は我流。お母さんは私が家事をやるのが当たり前になったみたいで「あんたが⁹、掃除しないから家が汚い」って言うようになった。

6年生のある日、学校から帰ると知らない男の人が家にいた。感じ悪い人だった。自分の家でもないのに、お母さんや私に買い物とか言いつけた。



6「先生」：厳しい家庭で育った子どもたちにとって「先生」との出会いは成長に大きく影響を及ぼします。状況を理解してくれ、よりそい、味方になる先生に出会った経験がある若者は人への信頼が感覚的に分かるので、支援が比較的スムーズに進みます。逆に裏切られたり、無理解やプレッシャーを受けた経験がある場合には不信感が根強く、支援関係を構築することが難しくなる傾向があります。親以外の大人と出会うチャンスが少ない子どもたちにとって先生という存在はとても大きいのです。

しかし、教員養成のプログラムに生活困窮に関する基礎知識や実態を学ぶ内容が少ないのが現状です。教師を目指す人材が知識だけでなく、当事者との交流や体験的に知り、感じる機会が非常に重要であると言えます。

7「朝起きれない」：幼いころから生活リズムが大きく乱れている家庭も少なくありません。朝に起きる、ご飯を三食食べる、掃除洗濯をするなど基本的な生活習慣の経験、感覚がないことも珍しくありません。若者たちの生活リズムの乱れは後にもなかなか根強いことがあります。長期間の過酷な生活の後遺症、もしくは幼少期からの生活習慣の基盤が弱いことが影響していると考えられます。

8「だんだん恥ずかしくなっていく」：生活困窮に伴う「生きづらさ」を自覚したり、他の家庭や親との比較ができるようになるのは9～10歳前後です。小学校低学年までは、あまり課題意識がなくても、この頃になると周囲からのからかいが始まったり、自分でも周囲との違いが分かるようになります。「あれ？うちっておかしいのかもしれない」と漠然とした違和感や恥ずかしさなどが出てきます。しかし、一方ではそれを整理して理解したり、納得するだけの知識や経験があるわけではないので、漠然とした不安やいらだちになって行動として表面化することもありますし、自分の内面に押し込めることで心身症の症状が出る場合もあるなど、本人の負担が多くなります。いじめの芽が出始めるのもこの時期が多いです。

9「あんたが…」：生活困窮の家庭で育つ子どもたちは親を恨んだり責めたりするよりもむしろ「自分が悪かった」と自分を責める、自己肯定感の低さが根強く見られます。その背景には幼いころから褒められることが少なく「あんたのせいで」「あんたがいたから」と何かと責められたり、怒られたりした経験が過剰に蓄積していることがあります。

親が責める背景には親が抱える課題へ支援が届いていない状況が子どもへ跳ね返っている現状があります。「どうせ、私が悪いんでしょ（＝私は助けてもらえない）」と親から言われる経験をしている子も複数いました。若者たちは「親を助けてほしかった（ほしい）」と言います。

中学校に入学した。
テニス部に入り、最初は楽しかった。



エピソード1 「いじめ¹⁰」

クラスである子がはぶかれ始めた。自分のはぶかれるのが嫌で一緒に無視したり、悪口を言った。数カ月後には他の子がはぶかれた。そして、自分もついにいじめのターゲットになった。上靴に画鋏が入っていたり、ジャージがなくなったり、鞆に絵具をかけられて笑われた。先生に言う気はしなかった。小学校の時は学校だけが楽しみだったのに、勉強もわからなくなってだんだん楽しくなくなった。



エピソード2 「信じられない出来事¹¹」

具合が悪って理由で学校を休みがちになった。家にいるのも嫌だったけど、他に行くところもない。ある日、家で寝ていたら、お母さんの彼氏が

私の布団に入ってきて、キスされた。ショックで声が出なかった。お母さんは隣で寝たふりをしていた。それから、家にいるのが本当に嫌になった。学校にも居場所はないから、公園のブランコに乗っていたり、大型スーパーで時間つぶしをした。



エピソード3 「支援との出会い～一時保護」

中2からあんまり学校に行かなくなった。夜も家に帰らずにネットで出会った友達と遊び歩くようになった。親は心配しなかったかって？別にしてないと思う。時々、お母さんが調子悪い時「いつ帰ってくるの？」って何度も電話がきたりしたけど、基本、自分の都合で連絡してくる。それに、出会い系は使えるよ。ご飯食べさせてくれる人もいっぱいいるし、お金をくれたり物も買ってもらえる。明らかにエロ目的の人もあるけど、そういうのは適当にあしらう。ある日、夜の街をふらついていて補導されて、児童相談所に連れて行かれた。生活ぶりがばれて、とりあえず**一時保護**¹²された。「保護してくれるんだ～」ってまじな生活を想像したけど、全然違った。『あなたも悪いからね。もう少し我慢すればいいんだよ』って説教されて、監視つきの個室に入れられた。出なくて暴れたら、ますます監視がひどくなった。



数日後、親が迎えにきた。別人みたいに泣きながら、「すみませんでした。」って謝ったら、「お母さん、**しっかり**してね」「**ちゃんと**¹³お母さんの言うこと聞くんだよ」と言うだけで、学校に通うことを条件に家に帰された。内心『お母さんがしっかりするわけないじゃん。お母さんの言うこと聞けなんて、何もわかってない』って思った。一時保護の生活は絶対に嫌だったから出てきたけど、家や学校のことを考えると絶望した。

帰り際に児童相談所の人と面談したら、**不登校の子たちが行く学級やフリースクール**¹⁴を勧められた。環境を変えれば行けそうな気がしたけど、遠くて通えなくて諦めた。フリースクールはお金がかかったから無理だった。

結局、居場所は見つからなかった。その後も学校に行かずに引きこもっていた。それでも、トラブルさえ起こさなければ児相に連れて行かれることはなかった。

10「いじめ」：いじめの問題も深刻です。家庭の弱さは多くのいじめのターゲット要素になります。いじめられることを避けるために、さらに弱い子をいじめめることもあります。いずれにしても、相談できないのも特徴です。「言っても無駄」「相談すると事態がひどくなる」などじっと我慢するもしくは、自分なりの回避方法を試しますが、それが余計に負担となります。いずれにせよ、それらの経験の傷は深く長く残ります。

11「信じられない出来事…性被害」：生活困窮問題で支援につながる女の子の性被害の実態は深刻です。直接的な性被害も多くありますが、家庭の中で日常的に繰り返される性行為が間接的な被害もかなり見られます。まだまだ潜在している問題ですし、またこうした被害は長い時間を経て表面化したり、長期間本人の自己イメージや心身の成長に悪影響を及ぼします。

また、支援者の中にはそうした実態を信じようとしなかったり、避けようとしたり、誤解をしたり、本人を責めるなど無理解から二次被害を与えてしまうことも多く見られます。支援者の理解と支援策の広がり求められます。

12「一時保護」：児童相談所の支援を受けた経験のある子も多くいますが、思春期の一時保護の経験者からの抵抗感は根強いものがあります。子どもたちにとって究極の選択（「悲惨な家か一時保護か」）となり、どちらからも逃げようとする逃避行為（リストカットやオーバードース、家出、出会い系など）が激しくなる様子がありました。家出でもなく、一時保護でもない安全な家出場所を望む声が強くなりました。

13「しっかり～、ちゃんと～」：生活困窮背景の経験不足から当たり前のことができないと「しっかり」「ちゃんと」というような曖昧な励ましや指導を受けることも多いようです。具体的なイメージや知識やロールモデルがない中で曖昧な指導をいくら受けても効果はありません。しかし、その結果、「何度言っても分からない人」と誤解されることもあります。

発達障がいを抱えている場合にはさらに影響は深刻です。本人の特性や環境に応じた学習や支援が受けられないことでますます、行動面や社会面、精神面などの二次的な障がいにつながり、孤立を深める要因となります。

14「不登校の子が行く学級、フリースクール」：学校に居場所を失った子たちは別の居場所を求めます。教育委員会が設置している適応指導教室がありますが、数が限られていて遠方で通うのが大変だったり、学校への抵抗感が強い場合には足が向きにくい面があります。民間のフリースクールも数が限られ、何よりも利用料がかかることで生活困窮の家庭が活用することには高いハードルとなります。子ども期に居場所を得られなかった経験は自立に必要とされる共同体感覚の獲得に影響を与えます。子どもたちにとって安心できる居場所の存在が求められているのです。

中学校時代 その3



エピソード4 「不登校と受験」

学校にはほとんど行かなくなった。家では弟が生まれて、赤ちゃんは可愛かったから子守をしている方が楽しかった¹⁵。お母さんも私が子守をしてくれるから都合がよかったと思う。弟には自分と同じような思いはさせたくなかったから。

すっかり勉強はわからなくなった¹⁶。もともと勉強なんて得意じゃない。でも、先生が「進路」の話をしにきた。相談する人もいないし、高校のことわからない。自分なりに考えて願書を書き出して出したら「お前の行ける高校なんてない」と目の前で破られた。めちゃくちゃ悲しくなった。結局、行けそうなのは定時制の高校しかなくて、そこにした。正直、どこでもよかったし、どうでもよかった。



高校入学

何とか受験を切りぬけて定時制高校に入学した。学校に行くのはあまり気が進まなかった。でも、行ってみたら中学校とは雰囲気が全然違った。不登校や家庭の状況が似たような子¹⁷がいっぱいいた。先生たちの関わりも違った。面倒な説明や気遣いがびっくりするほど要らなかった。学校のイメージが変わって、ちょっと行ってみようかな?と思った。



高校時代

エピソード1 「バイトに明け暮れる」

学校は楽しかったけど、携帯代を親が出してくれなくなってコンビニでバイトを始めた。バイトでも友達ができた。自由になるお金もできたけど、学校が休みがちになってきた。夜に働くと朝起きなくて学校に行けない。シフトに穴があったときに引き受けていたら、店長やバイト仲間から急なシフトを頼まれることが多くなった。何となく面倒で断れなかった¹⁸。



先生が心配をして、電話をくれた。個人面談の時に思わず家の状況についても話したら、心配してくれて「専門家に相談しないか?」と言った。でも、よくわからない人に相談する気持ちになれなかった。先生が心配してくれてる¹⁹のはよくわかった。ずるずると単位がヤバくなっていった。

エピソード2 「もう限界!」

バイトと学校、家のことで無理をしていたら、体調を崩してた。数日バイトを休んで家で寝ていたら、親に意味不明にののしられた。自分の中でブチンと何かが音を立てて切れた。こんな暮らしはもう嫌だと思って「もう限界」だとメールをした。先生は「やけを起こすな。明日学校にまずは来い」と言った。次の日、まずは学校に行った。前にも聞いていた²⁰応援してくれる人に相談してみないかとまた言われた。先生の話では家から離れて泊まるところもあって実習ができるようなところもあるらしい。もう、どうにもならないし、何でもいから何かが変わるかもしれないと会うことにした。



15「子守りしている方が楽しかった」：若者たちの多くは家事や育児を担わざるを得ない状況を経験しています。特に弟や妹、甥っ子、姪っ子、いとこなど自分よりも年下の子どもの世話を献身的になることが多いです。そうした献身ぶりは結果として養育者の依存を強め、本人にとっても自分の有用感を得る数少ないチャンスとなるため進んで担おうとする傾向もあります。こうした事態への周囲の反応は複雑です。年下の子どもの成長を考えると親に世話をされるよりは環境がよく見えますが、世話をしている子どもたちの権利は明らかに侵害されているとも言えます。しかし、本人が意義を感じているように見える場合には介入が難しく見守るしかない状況になることもあります。

背景には子どもは家庭が育てるものという前提や困窮世帯への情報や支援からの排除の現状があります。子育て支援、家事支援、保育サービスを優先して活用できる、届ける仕組みがあれば、子どもたちの権利を守る可能性が広がります。

16「勉強は分からなくなった」：学校に安定して通えない、また家庭で学習する環境にない子たちは当然のことながら授業からは置いていかれます。小学校では何とかついていけても、中学校になると顕著になります。学校の授業はお客さん状態となり、学校に行く動機がますます薄れます。

最近、広がりつつあり、生活困窮者自立支援制度のメニューにもなっている学習支援はそうした子どもたちにとって居場所にもなり、勉強の取り戻しを安心してできる機会になります。しかし、あまりに学力向上のみに着目し、他の問題への想像や配慮がないと学習支援からの排除にもつながりかねない非常にデリケートな支援だと言えます。

17「似たような子」=ピアの存在の大きさ：中学校までは学校への印象が非常に悪く、ほとんど学校に行かなかった子が高校は毎日元気に通うことは珍しくありません。その背景には「似たような境遇をわかり合えるピアの存在」が大きくあるようです。これまで周囲に気を遣って言えないようなことが当たり前に言えたり、分かってもらえたり。または、自分よりも苦勞をしている友達がいることを知って「自分だけじゃない」と思えることがある種の安心につながっています。

18「断れなかった」：生活困窮の家庭で育った子たちはバイト先や学校で役割を引き受ける時など「断れない」ことがよくあります。自分が必要とされることへの潜在的な渴望感や相手の意に反する言動を取ることに恐れが背景にはあります。結果としてバイト先や友達などから都合がいいように使われることもあります。本人は何となく嫌だと思っても「断る」ことができません。大切にされる経験がないことが、都合いいように使われることと必要とされることの区別をつげにくくしています。

これは女の子たちの男性依存や性的搾取の問題にも共通して流れている背景と言えます。

19「先生が心配してくれてる」：高校は学力による選考の仕組みによって似たような階層や背景の子どもたちが集まっています。先生たちは生徒たちの生活の課題への理解があり、対応にも慣れていたり、サポート体制が手厚かったりして、子どもたちは相談や事情を話したりすることへのためらいが少なくなります。

しかし、一方では高校生にもなれば事態は慢性化、深刻化していて、子どもへのダメージもかなり蓄積しています。理解者や支援につながるにあまりにもは遅すぎるのです。

20「前にも聞いていた」：若者たちが実際に支援につながるためには時間と手間がかかります。先生が必要を感じて勤めても「いや、いいです」と断ることも多いです。頼まれたことは断るのが苦手ですが、自分のために何かをしてくれることに対しては過剰に遠慮することがよくあります。何度も何度も情報として伝えておく必要もありますし、場合によっては他の友達の相談経験を伝えてもらうこともあります。また、出会ってから次のアクションにつながるためにも長い時間がかかることがあります。いずれにしても困っていて、支援できる人がいてもそこに簡単につながるわけではなく、身近な先生たちの信頼関係の構築と粘り強い関わりが重要なのです。

「ようやくスタートラインへ」

愛はこうして先生の熱心な支援と関係機関との連携によって、厳しい環境から脱出し、生活寮で暮らしながら就労のための活動に参加することになります。しかし、未成年の愛にとって親が認めてくれるか心配でした。でも、逃げるのではなく自立のための「泊まりがけの研修」であり、先生の説得もあって、快く送り出してはくれませんでした。反対もされませんでした。

もう一つ心配だったのは、生活費。稼ぎがあるわけでも、援助してくれる人もいません。幸いなことに生活寮は平日の食事はついていて、家賃もかからないとのこと。自分のためのお小遣いはアルバイトを紹介してくれたり、活動に参加することや手伝えることで得ることができそうです。

それなら、何とか頑張れるかもしれない。これまでは全然だめで夢も希望なかったけれど、今よりはましだから。とりあえず、「自立への道」のスタートラインにはようやくたどり着いたのです。

北野愛さんのストーリーを作成するにあたり、本事業で18歳から38歳までの15名の若者たちからこれまでのライフヒストリーの聴き取り調査を行いました。(何らかの行きづらさを抱えている当事者が若者たちの人生を聴き取るスタイル) モデルストーリーにはそのエピソードの一部を盛り込みましたが、ここでは聴き取りの内容を一部データとして紹介します。

(32項目中 最多17項目該当 15名の平均値 10.6項目の該当)

- | | | | |
|------------------------|-----|--------|----|
| (1) 本人の状況 | | | |
| ◎生まれつきの何らか障がい (あるいは疑い) | 4名 | | |
| ◎学校でいじめられた経験 | 7名 | | |
| (2) 二次的な障がい、状態、症状 | | | |
| ◎非行や犯罪加害 | 5名 | | |
| ◎不登校の経験 | 10名 | | |
| ◎うつなどのメンタルヘルス | 7名 | | |
| ◎依存 (リストカット、ODなど) | 5名 | | |
| ◎神経症的症状 | 2名 | | |
| ◎引きこもり | 7名 | | |
| ◎自殺未遂 | 2名 | | |
| (3) 虐待などの家庭内の暴力・抑圧経験 | | | |
| ◎心理的虐待 | 8名 | ◎身体的虐待 | 4名 |
| ◎ネグレクト | 10名 | ◎性的虐待 | 2名 |
| ◎DV環境 | 3名 | ◎家庭内暴力 | 1名 |
| (4) 経済定期困窮 | | | |
| ◎生活苦 | 12名 | | |
| ◎生活保護受給経験 | 9名 | | |
| ◎借金問題 | 8名 | | |
| ◎失業・倒産 | 8名 | | |
| (5) 家族の被災、事故、病気や障がいなど | | | |
| ◎犯罪加害 | 2名 | | |
| ◎自殺未遂 | 2名 | | |
| ◎事故死 | 2名 | | |
| ◎被災 | 2名 | | |
| ◎精神以外の病気 | 2名 | | |
| ◎精神疾患 | 7名 | | |
| ◎障がい | 2名 | | |
| (6) 保護・養護経験 | | | |
| ◎社会的養護 | 1名 | | |
| ◎公的保護 (一時保護・補導等) | 4名 | | |
| ◎私的保護 (親戚、友人・知人宅など) | 6名 | | |
| (7) 家族との離別、死別 | | | |
| ◎離婚 | 11名 | | |
| ◎失踪・行方不明 | 1名 | ◎死別 | 4名 |

『個人モデル』VS『社会モデル』

